

「闇バイト」

ヤ……闇バイト
主……主人

（一軒家の一室 下手より不審者侵入、室内を物色し始める。）

ヤ「金目の物金目の物と、おお指輪にネックレス、時計いいねえ。隣は仏壇かあ（一応チンして拝んでおく）」「お邪魔させていただいております。つと」

主「程なくして上手より家の主人が帰ってくる。」

ヤ「おたがいまー」

二人「あああああーっ！」（思わず大声を出す二人）

ヤ「動くな！（ナイフのようなものを突きつける）」「いけね日本人とバレないようにしろってボスに言われてたんだ。」

こんな時は（と言ってスマホを出し翻訳機能に向かつて小声で「大人しくしろ騒ぐと殺すぞ、で変換。ポチッ」と

主「主人に見せる。」
主「大人しくしろ騒ぐと殺すぞ。（AIの声っぽく）」って

日本語そのまんまですけど。」

ヤ「うるせー手エ上げろ！ここまでできてバレちゃあ仕方がねえや。」

主「いやまだ出会い頭で物語始まったばかりですけど」
ヤ「うるせーな、ちくしょう何かお前をとつ縛るもの出せ。」

紐とかガムテープとか。」

主「あのひよつとしておたく拘束する道具も持って来てないんですか？強盗のくせに。」

ヤ「強盗のくせに？強盗のくせに？」
「強盗のくせに？強盗のくせに？」

主「強盗のくせに？強盗のくせに？」

主「バイトって、ひよつとして闇バイトだぞ。」
「バイトって、ひよつとして闇バイトだぞ。」

流行りの？て言うか、どう見ても強盗に入られる年のですよね。」

ヤ「何だよ、闇バイトに年齢制限あんのかよ。金に困つてるもんはお互い様だろうがよ。さつきからいちいち口出ししやがつて黙ってる！それより金どこだ。」

（タンスを視線で指す。）

ヤ「ここか、何段目だ、ここか、右か、下の段？上？（主人

は視線や首でこたえる。）

ヤ「しゃべれ！言え！」

主「ありません！。うちには国が総額六〇兆円もあるなん

ていうタンス貯金はありませんし、国から2ヶ月ごと十五日に頂く年金とシルバー人材センターの自転車整理で頂くお給金だけで細々、

主「やめろーそれ以上正確な統計で説得するな。一方企業の内部留保は600兆円を遥かに超えたなどと付け加えるんじゃない。何だよ、俺と、俺と一緒にじゃねえか。」

主「あんた……」

主「さつきくすねた貴金属類をポケットから取り出し」ひよつとしてこれはお連れ合いの。」

主「お恥づかしい、今だに家に帰る時は居ないと解っていてもついい言っちゃうんですよ。」

二人「ただいまうって。」

主「うわああー（泣く）。なんか長居しちゃったな、これで美味いもんでも食って（身銭を切る）。」

主「これじゃあ、あなたがまたお金に困るんじゃないやあ。」

主「もう少し金持ちの家に入りやいいだけのことさ。通報するかしらないかはあんたに任せるから、じゃあな。（と言つて素早くさる）。」

（彼を見送る、スマホを取り出してじっと見つめる。）

主「あ、もしもし、はい二丁目の田中です。大至急御願います、松の鰻重二つ。（電話切る。上手に）おーい鰻重頼んだぞ（上手の妻に）。」



イメージ